

地図の基礎基本③

一県（都道府）のようすの指導法一

愛知教育大学教授 寺本 潔

1 県指導のスタンダード

4年生で本格的に地図帳を使用する場面の一つが、「県（都道府）のようす」の単元です。児童にとってある程度の知識を有している内容だけに教師も指導の手をゆるめがちになります。そこに指導の落とし穴も待っています。

その落とし穴をふさぐ第一のポイントは関係位置の指導です。自分たちの住む県（都道府）が日本の中のどの辺りに位置しているか、案外あいまいな児童がいます。まず最初に地図帳のp.1～2で紹介されている「都道府県の区分」を開かせてください。その後で、次の三つの文章を括弧つきで黒板に書きます（ここでは新潟県を事例に述べます。太字は答えを示す）。



帝国書院「小学生の地図帳（初訂版）」p.2

- ①新潟県は日本の中央に位置する（中部）地方の中に入っている。
- ②新潟県は（日本）海に面している。
- ③新潟県は北では（山形）県に接し東では（福島）県、南では（群馬）県と（長野）県に、そして西では（富山）県に接している。

国土の学習は5年で詳しく扱いますが、自県がどの地方に属しているかはここできちんと確かめておく必要があります。また太平洋側であるか日本海側の県であるかもとても大切な要素です。それは県としての気候の特色にも影響を与えるからです。

また東西南北の隣接県を確認させておくことも重要です。3年生で学んだ「まちのいろいろな仕事」の学習で扱った「他地域とのつながり」の振り返りにもなり、その後に控えている産業学習や国土の学習の布石にもなるからです。

ところで関係位置の概念は意外と児童にとってはむずかしい内容です。福島県から見れば新潟県は西隣の県である事実がうまく理解できない児童がいるからです。隣接県の名称知識は生涯その県で生きていく場合の常識になります。軽視できない知識なのです。

この後、同様の見方で児童が住む「わたしたちの市」が県内のどの位置にあるのかも確認させます。ここでも周辺市町村との関係位置の学習が可能ですが、市の学習は3学年までに終了しているはずですから簡単な復習程度でけっこうです。

県のおおまかな位置が確かめられたら、発展的な学習として巻末についている「都道府県別の統計」で県の面積や人口および人口密度を確認させることも大切です。赤字で上位5位までが示されているのでこの中にもし自県が入っていたら要注目です。入っていないくても、面積で第一位の北海道と比べて自県はどれくらいの面積か、東京都と比べて人口では何位か、などのおおまかな把握は扱っておきたい指導項目です。

人口密度に関してはタテヨコ1000mの四角の土地の中に何人が住んでいるかの平均である点をていねいに板書して解説してください。

第二のポイントは地形と土地利用の指導です。ここから各地方の地図を開かせます。しかし新潟県は中部地方に属する県なのに地図帳では「関東地方の地図」の頁（p.35～36）にも載っています（福島

県や山梨県も同様)。このように地方区分は行政的な区分の一つ（国の出先機関などの配置にその姿がみられる）であり、児童や保護者が抱く感覚とは異

なった地方区分にもし自県が入っていたら興味づける話題になります。



帝国書院『小学生の地図帳（初訂版）』p.9～10

地形の指導では山と平野、川の3点が最重要項目です。たとえば新潟県の指導場面では「県の東側に越後山脈がある。」「日本海側に越後平野が広がり、そこに越後山脈から発した信濃川や阿賀野川が流れている。」というように山岳・平野・河川をセットで扱うことが大切です。なぜなら山から川は発し、土砂を下流に運んで平野を形作るからです。砂場で砂山を築き、ジョウロで水を流した経験を思いださせてください。

地形を先に扱えば、その後で土地利用に気づかせることが容易です。「県内の山がちのところはどんな利用のされ方になっていますか？」「田や畑は地形がどなところ広がっていますか？」「工場や住宅、商店などの多いところはどこですか？」と発問すれば理解しやすくなります。

第三のポイントは、県内の人口分布図を色分けさせることです。4～5種類の人口規模別（例：1万人未満、1～5万人、5～10万人、10万人以上）

に色分けする作業を2人1組で取り組ませれば時間の節約になります。

できあがった地図を見て「地図帳でこれまで調べた県の地形や土地利用と、今色分けした県の人口の地図とを比べて気がついたことを話し合しましょう。」と指示してください。そうすれば「平野のところに鉄道や道路が網の目のようになっている。人口も網の目のところに多い。」「人口の少ないところは山がちで森林になっている。鉄道は走っていない。」などといった交通との関係も自然にみだせるようになります。

この後で小単元では県の自然や産業（特に伝統工業のさかんな地域）と人々の暮らし（高地の暮らし）に入っていきます。

つまり、位置→地形・土地利用→人口・交通→産業・暮らしという順番で指導するのが県学習のスタンダードなのです。

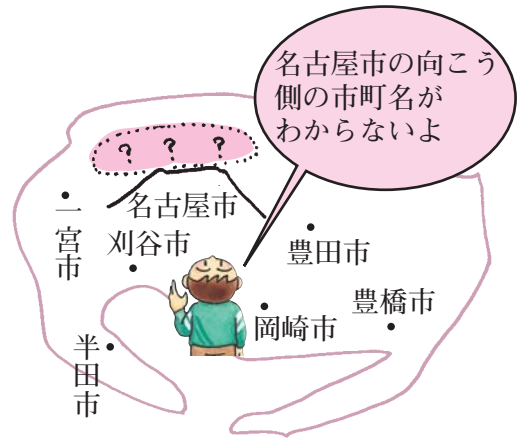
これは地理を理解する手順としても優れた方法です。知りたい事象が「どこにあるか」をまず扱い頭の地図の中に位置づけます。その後で「その場所がどうなっているか」「何と何が関係しているか」「その地域の個性は何か」という順で知識を増やしていけるからです。

もちろん、こういったスタンダードな入り方でなく、美しい風景や祭りの写真が印刷された県の観光振興ポスターから導入の授業をはじめたり、名物料理や県産品の実物から入る授業も面白い展開が考えられます。たとえば新潟県の場合は何といても米の生産高日本一ですから「米づくりを支えている県の地形、土地利用、人口、交通、産業、暮らしの特色を探れ！」と焦点化することで県の姿が描きだせます。指導の工夫に期待したいところです。

2 県内地名のブラックボックス

4年生を対象に県内地名認知度の調査（白地図に指定の市町名を記入する調査）を愛知県でやったことがあります。注目すべき結果として名古屋市の存在が地名認知に影響を与えている事実が浮かび上がってきました（詳しくは拙著『子どもの初航海—遊び空間と探検行動の地理学』古今書院、2004年発行参照）。

模式的に説明すると次の絵のようになります。



自分の住む近辺のおもな市町の認知と県内の都市規模の大きい市の認知度は当然高い傾向（70パーセント以上正答）にあります。注目すべき傾向として名古屋市とその周辺の都市名は十分に認知されていると予想したのですが、意外にもそうではなかったのです。

地形にたとえば名古屋市という高い標高の山岳に立ちふさがれ、その山麓の市町名の中で、いわば山陰にあたる市町名の認知がとても低い結果となったのです。

新潟県を例にあげれば、これはわたくしの想像ですが、長岡市に住む児童にとって県南部の地名と新潟市の認知度はとても高いものの、新潟市という山の山陰にあたる豊栄市や新発田市、村上市などはあまり知られていない傾向にあるのではないかと想像できるのです。

児童は県内の地名（都市名や町村名など）について買い物やレジャーで行ったから知っている、親戚や友だち、担任の出身地だから知っている、テレビや交通案内で知っている、という三つ程度の理由で数個の県内地名を認知できているにとどまっています。けっして満遍なく県内の市町村地名を認知しているのではなく、いくつかの重大なブラックボックスを抱いた状態で自県のイメージを作っているのです。

県内に名古屋のような大都市を有する都道府県の場合や隣接県に巨大都市がある場合など、影響が大きく現れます。たとえば大阪府や宮城県の場合、千葉市やさいたま市の背後（東京と逆の方向）にある市

町名知識などがブラックボックスになっている危険性があります。これを地図指導で手当てしておく必要があるのです。

3 人やものによる「つながりめぐり」を楽しもう！

最後の小単元で他地域とのつながりを扱うことが多いかと思います。このときに図上で県内の主要都市（特色ある地域も含む）めぐりと国内の他地域、海外とのつながりめぐりを指旅行（人差し指を自分の分身と位置づけ、地図上で交通路に沿ってなぞりながら地図を読み取らせる手法）の要領で楽しく学習させることが大切です。新潟県を事例にすれば県の地図や「日本列島を見わたす地図」（p.16～19）で県内の数箇所の都市や県外の都市までの図上旅行

を鉄道や高速道路に沿って楽しませると効果的です。さらに、新潟港から北海道やロシアにも航路が引かれていること、空港から全国や海外に路線がのびていることを扱います。できるだけ具体的な教材をこの指導に使ってください。たとえば、日本海を走る小樽行きフェリーの切符や新幹線で東京駅までいった際に購入した浅草人形焼の包み紙、九州の親戚から届いた宅配便の宛名ラベル、ロシア語で書かれた案内板の写真などが学習にリアリティをかもしだします。「この写真に写っている街はどこでしょう？」と担任教師が訪問して撮影した記念写真から場所当てクイズをだして、そこから交通路調べに入っても面白いでしょう。

以上のように県の学習は自県への愛着と広い視野の形成をねらいとして進めたいものです。



帝国書院『小学生の地図帳（初訂版）』p.10